

11. 作手村の遺跡分布

七原 惠史¹⁾

I. はじめに

筆者は1986（昭和61）年、作手村田ノ口遺跡の調査を実施する機会を得た。調査を実施したのはわずか24m²であったが、遺跡の年代や性格を把握することができた（七原 1986）。その後、大野原湿原の調査にも参加する機会ができ、考古学の立場から調査に加わった。大野原湿原と考古学との接点を求めたのであるが、直接結びつくものはなかった。しかし、これを機会に、作手村の遺跡とその分布状態について検討してみたい。

II. 遺跡の分布状態

作手村で、今日までに確認されている遺跡は総数78地点で、その内訳は縄文時代28地点、弥生時代13地点、古墳時代以降歴史時代37地点である。遺跡の分布状態を順次とりあげてみる。

(1) 縄文時代

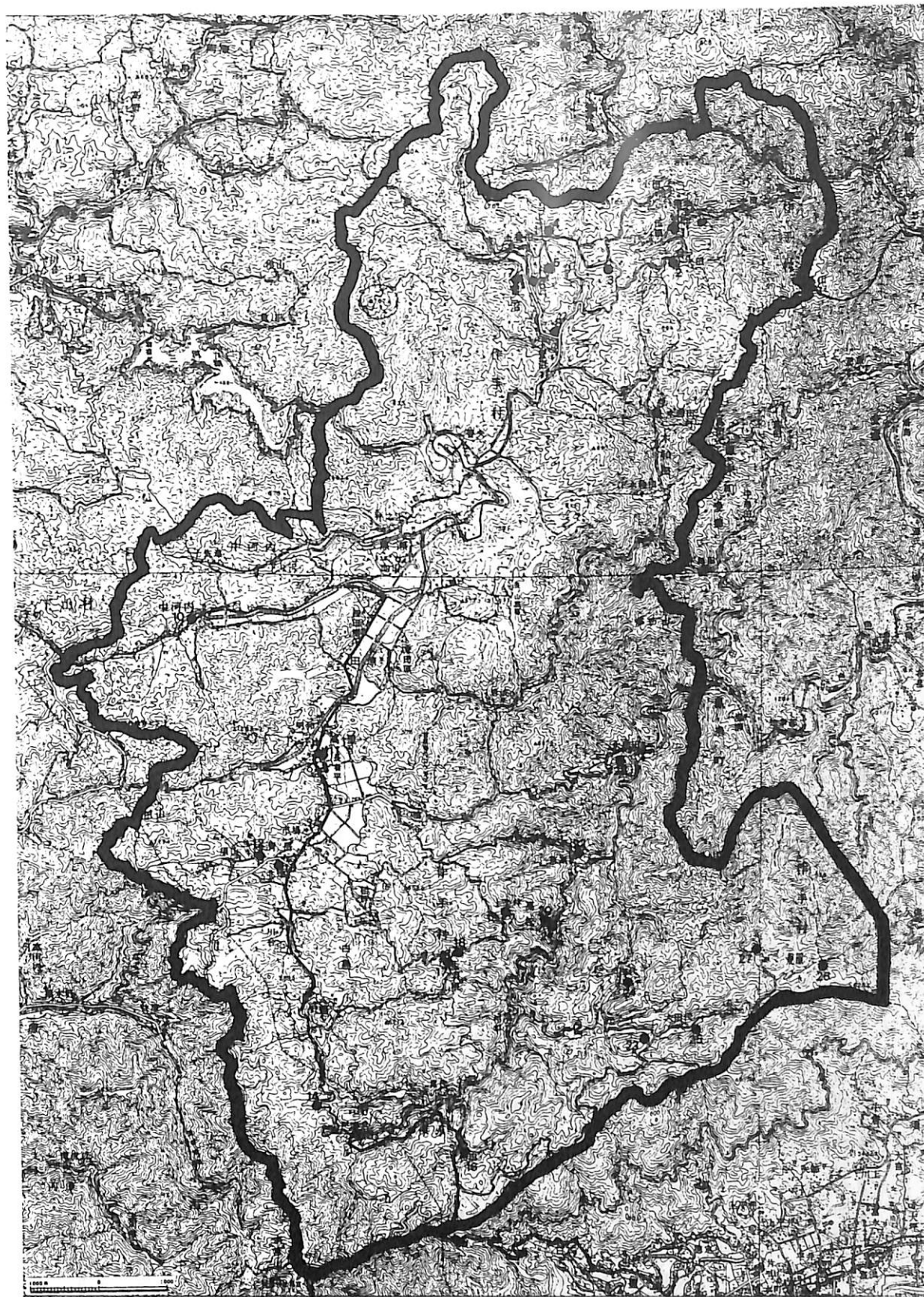
縄文時代の遺跡の28地点は、遺跡総数の35%に及び、その数の多さに驚かされる。これら縄文時代の遺跡を地図上におとすと第1図のようになる。各遺跡の名称と字名、地形、出土遺物などを示すと第1表のようになる。

遺跡の分布状態をみてまず気づくことは、北の遺跡群と南の遺跡群の二つに大きく分かれていることである。北の遺跡群は道具津遺跡（遺跡番号1、以下同じ）、小夫田(2)、イモリ山(3)、田ノ口(4)、ノリケエ(5)、ヌメガイツ(6)、城屋敷(7)、蔵前(8)、木和田(9)の9遺跡である。南の遺跡群は高里の木戸口遺跡(11)から大和田の徳衛遺跡(28)までの18遺跡である。北中河内遺跡(10)は両遺跡群の中間にあってや、離れているのでその性格が異なるものとして後に述べる。

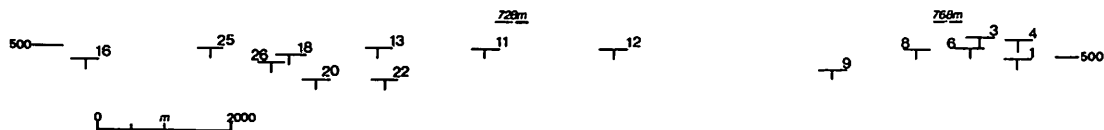
次に北の遺跡群の分布状態をみると、比較的狭い範囲、直径約3km内に集中していることがわかる。これに対して南の遺跡群は相互に距離があり、まとまりを欠き、独立性が強い。これらの遺跡の垂直的分布を検証してみると第2図のようになる。すなわち北の遺跡群は標高500mより上に分布しており、南の遺跡群は標高500m以下に分布している。中には小林遺跡(21)のように標高250mに位置するものもある。

こうした遺跡分布の特色を生みだしたのは、本村の地形的要因によるところが大きいと考えられる。本村は全体に標高が500m前後の高位にあるが、徹視的にみると、北部の菅沼、守義は標高500m以上に位置しており、また山地が入り組んでいるので、

1) 愛知県立守山高校教諭



第1図 作手村遺跡分布図(1) (縄文時代~弥生時代) (1 : 50000)



第2図 作手村遺跡垂直分布図（数字は遺跡番号、横線は標高、縦線は遺跡の位置を示す。水平距離は5万分の1、標高は倍で示してある。）

居住に適する空間がきわめて限られる。これに対して南部の白鳥、保永、高松では谷地形が多く、比較的平坦な地点に居住地が求められている。居住に適する地点が相互に離れているのでそれぞれ独立しているように看取される。両遺跡群ともに可能な限り平坦に近い緩傾斜地が選ばれている。

ところで、北の遺跡群の南端にある蔵前遺跡(8)と南の遺跡群の北端にある木戸口遺跡(11)との間、黒瀬、田原の約7kmの範囲には遺跡が確認されておらず、空白地帯になっている。大野原湿原の成立から時間的にもっとも近い縄文時代において、この空白地帯があるのはどのような理由によるものであろうか。その理由として考え

第1表 縄文時代遺跡一覧

（『作手村誌』から作成一部修正）

番号	遺跡名	大字	地目	地形	遺物
1	道貝津	守義	宅地・畑	北西面する傾斜地	押引文、晩期？石棒
2	小夫田	守義	水田・山林	山間の傾斜地	石斧
3	イモリ山	守義	校地	東南面した山腹	
4	田ノ口	菅沼	水田・山林	山麓の傾斜地	後期加曾利B式土器、弥生中期、行基焼山茶碗
5	ノリケエ	菅沼	山林・道	小山の稜線近く	後期加曾利E式土器
6	ヌメガイツ	菅沼	水田・宅地	沖積地に続く傾斜地	打製石斧、磨石、砥石
7	本城屋敷	菅沼	水田・畑	山裾の緩傾斜地	時期不詳
8	蔵前	菅沼	畑・水田	南面した山麓	箱畑式？堀ノ内式、石鏃、石匙、石刃
9	上木和田	木和田	畑	山腹	突帯ある土器
10	北中河内	中河内	水田	山麓の傾斜地	堀ノ内式？
11	木戸口	高里	畑・宅地	盆地中央部の低台地	押引文、有基石鏃
12	市市場	清岳	畑	南面した緩傾斜地	時期不詳
13	タイコ屋敷	清岳	畑・山林	南東面する緩傾斜地	後期堀ノ内並行
14	小金沢	保永	山林	沢添いの緩傾斜地	時期不詳
15	布路	保永	畑・宅地	南面した傾斜地	時期不詳・石鏃
16	中島	〃	畑	北面する台地上	時期不詳
17	平田	高松	畑	東面、山腹の傾斜地	時期不詳
18	南赤羽根	〃	畑	山間の傾斜地、南面	時期不詳
19	上小林A	〃	畑	南東面した山腹	後期～晩期か
20	上小林B	〃	宅地	山腹の小段丘、東面	後期堀ノ内式？石刃
21	小森林	〃	畑・道路	南東面した小段丘	時期不詳
22	大屋貝津	〃	畑	峡間の緩傾斜地、南面	北屋敷式（推定）
23	広梅	田代	畑	沢添いの緩傾斜地	時期不詳
24	砂平	〃	畑	山間の小台地、西面	時期不詳
25	砂畑	〃	畑	北面した山麓の傾斜地	時期不詳
26	荒原	荒原	畑・宅地	山裾の緩傾斜地、南面	時期不詳
27	吉ノ口	〃	畑	山狭の緩傾斜地、南面	山形押型文、石鏃
28	徳衛	大和田	畑	山麓近くの緩傾斜地	時期不詳、石斧、石刀

られるのは、本村における桜前線が示す気候的要因によるものがある。村誌に掲載されている1980(昭和55)年4月11日における桜の開花状況は、本村北部の守義鳴沢と南部協和小ではそれぞれ満開であるのに対して中部の郷土資料館では二部咲という状態で、南北両地域が温暖であるのに対して中部は寒冷であることと、遺跡の分布が照応しているのはこのような理由にもとづくのではなからうか。いまひとつは、縄文文化伝播の経路がある。それは、本村の北部は谷を挟んで北設楽郡設楽町と接しており、道貝津遺跡(1)や小夫田遺跡(2)は設楽町への通路にあっている。あるいは逆に北部から本村へ進出してきたことも考えられるのである。南部では本宮山を中心とする山地より東部の南設楽郡鳳来町との関連が強いように思われる。大和田から東へ進むと鳳来町一色の平坦部へ連絡する。ここでも鳳来町方面から作手村への進出も考えられる。こうして両遺跡群はそれぞれの地域の関連から成立したとみなすことができる。ひとり北中河内遺跡(10)は、本村の西部にあって、東加茂郡下山村や岡崎市へのルート上にあって、この方面との関係が考えられる。あるいは岡崎方面から進出してきた縄文文化が、中河内を通過して作手村のほぼ中央にきて、ここから南北両方向へ分かれたという経路も仮定としては成立する。ただし、北中河内遺跡は後期と推定されている。

さらに両遺跡群を凝視するとそれぞれの中に時間的な流れがあるかにみえる。北の遺跡群の中で時期的にもっとも早いのは蔵前遺跡(8)で、これに中期の土器が出土したというノリケエ遺跡(5)がつづき、田ノ口遺跡(4)などへ移行する。南の遺跡群では押型文が出土したという吉ノ口遺跡(7)に始まり、中期の大屋貝津遺跡(22)を経て上小林A遺跡(19)などへ移行している。これをみると、南北両遺跡群はそれぞれ独立していたかにみえる。

第2表 弥生時代遺跡一覧

(『作手村誌』から作成一部修正)

番号	遺跡名	大字	地目	地形	遺物
3	イモリ山	守義	校地	東南面する山腹の傾斜地	土器、時期不詳
4	田ノ口	菅沼	水田・山林	山麓の緩傾斜地	中期獅子懸式土器
6	ヌメガイツ	菅沼	宅地・畑	沖積地に続く緩傾斜地	後期寄道式土器
7	本城	菅沼	水田・畑	東南面した緩傾斜地	土器・後期か
8	蔵前	菅沼	山林・水田	山麓の緩傾斜地	中期または後期の土器
2	小夫田	守義	水田・山林	山合いの緩傾斜地	土器、時期不詳
11	木戸口	高里	畑	盆地中央部の低台地	後期寄道式土器、欠山式土器
12	広畑	田代	畑	沢ぞいの緩傾斜地	土器、時期不詳
15	布路	保永	畑	南面する傾斜地	後期の土器
16	中島	保永	畑	北面する台地上	後期の土器
22	大屋貝津	高松	畑	山麓の南面した緩傾斜地	時期不詳
26	長者屋敷	荒原	畑・山林	南面した山麓の緩傾斜地	時期不詳
28	徳衛	大和田	畑	山麓近くの緩傾斜地	後期の土器

(2) 弥生時代遺跡

弥生時代の遺跡は13地点で、縄文時代遺跡の半数以下に一気に減少する。各遺跡の名称等は第2表のとおりである。各遺跡ともに縄文時代の遺跡と複合している(第1図)。

本村における弥生時代は、中期から始まるようである。田ノ口遺跡(4)では中期の獅子懸式、三河における下長山式土器(久永 1966、七原 1984)が出土している。弥生時代中期には水稻栽培地を求めて、本村にまで来ているのである。しかし、弥生時代でも縄文時代の遺跡群と同様に南北両地域に分かれているのはそれ相当の理由があったもので、南北両遺跡群の中間地帯を精査することは重要なことである。弥生時代の両遺跡群内における時間的推移を検索するには資料が乏しい。

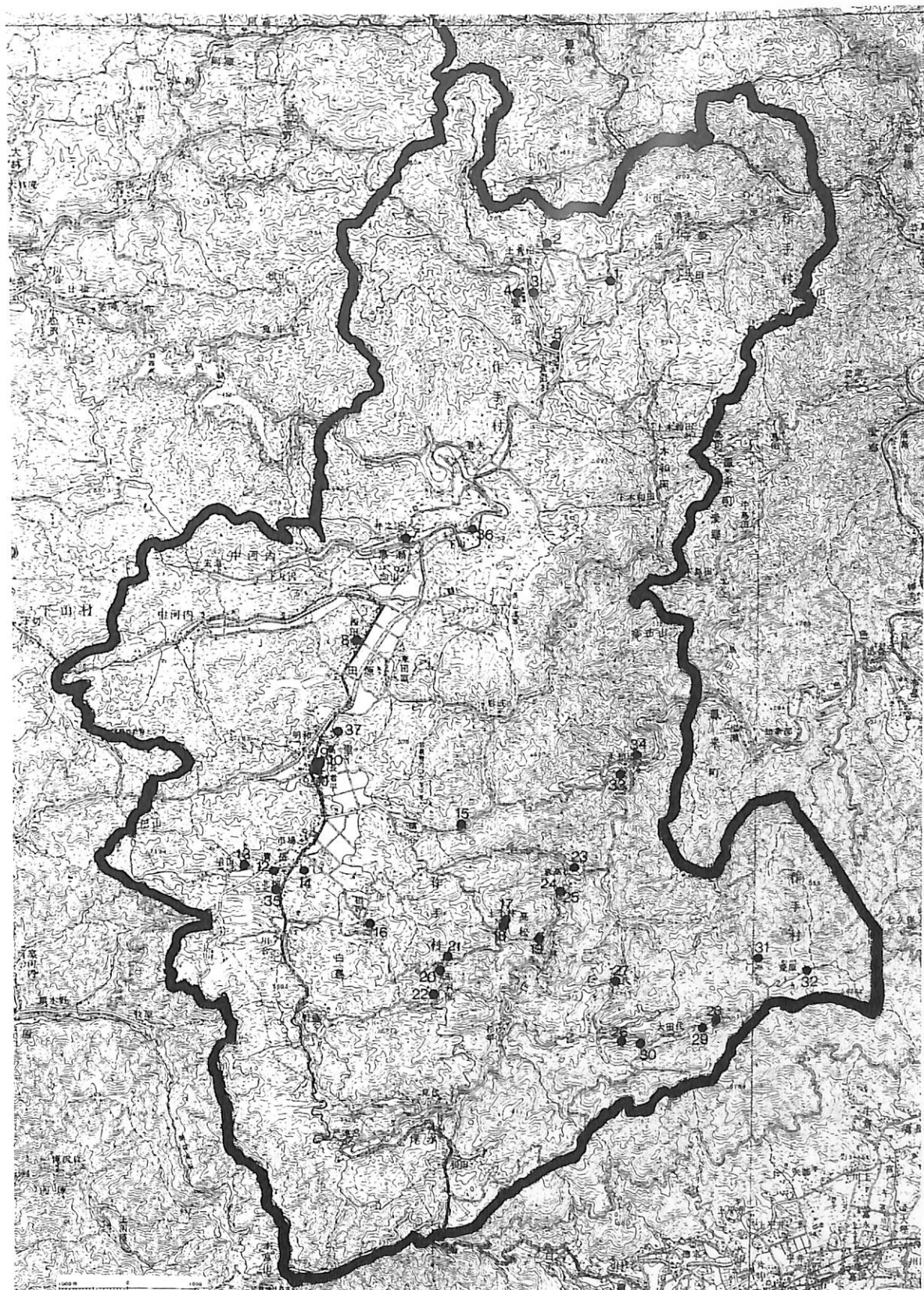
(3) 古墳時代以降歴史時代の遺跡

古墳時代以降歴史時代の遺跡は37地点である。この中には城跡など記載されていないものもあるので、実数はもう少し上まわるであろう。各時期別にみると古墳時代2、奈良時代8、平安時代前期～中期8、後期1、鎌倉・室町23である。各遺跡の名称等は第3表のとおりで、地点は第3図に示した。

これをみると古墳時代の遺跡はわずか2地点で非常に少ない。また古墳も1基も見つかっていないのも理解できない現象である。これに対して中世の遺跡は縄文時代の遺跡数に近くなり、またこれまで空白地帯であった黒瀬、田原地区にも発見されており、本村全域に生活圏が広がってきた。戦国期には北から武田氏が進出し、南から徳川氏が進出し、古宮城をはじめとして、本村も争乱にまきこまれることになった。

(4) 田ノ口遺跡

田ノ口遺跡は、山裾の西向斜面にあり、もとは山地の間の低平な場所全体に広がりをもっていたようであるが、水田に開発され、山裾斜面にその一部が残っている。遺跡から量的に多く発見されたのは、縄文時代後期の加増利B式土器で、この時期から生活が開始されたものである。浅鉢は直径42cm、高さ33.5cmである(図版2上)。弥生時代の土器は中期の獅子懸式土器(七原1984年)の壺の破片などである(図版2下)。管玉も1個検出されたが、弥生時代に伴うものか古墳時代に伴うものか目下調査中である。また中世の行基焼山茶碗も出土した。これらの出土した遺物から、田ノ口遺跡では、縄文時代後期(紀元前3500年頃)、弥生時代中期(紀元前1世紀)、中世(13世紀)の各期にそれぞれ生活が営まれた複合遺跡であることが明らかになった。各時期の遺構は残念ながら検出できなかった。なお、遺物包含層からアカホヤ火山灰が検出されたことは(藤井 1986)、今後の遺跡調査の参考になろう。本遺跡の報告書は目下準備中である。



第3図 作手村遺跡分布図(2) (古墳時代以降歴史時代) (1:50000)

第3表 古墳時代以降中世遺物出土地一覧

(『作手村誌』から作成一部修正)

番号	遺跡名	大字	古墳時代	奈良時代	平安前・中	平安後期	鎌倉・室町	室町中～桃山
1	イモリ山	守義					山茶碗	
2	田ノ口	菅沼		土師・須	灰釉陶器		山茶碗	古瀬戸鍋、常滑大甕
3	ヌメガイツ	〃					山茶碗	骨壺
4	本城屋敷	〃	土師器	土師器	甕	山茶碗	常滑大甕	天目、鍋、摺鉢、おろし皿
5	蔵前	〃					古瀬戸系皿	土師系皿、摺鉢
6	高畑	〃					山茶碗	古瀬戸、鍋
7	矢所	黒瀬					山茶碗	
8	西田原	黒瀬					山茶碗	摺鉢、鍋、古瀬戸
9	木戸口(1)	高里	土師器	須恵・土師	灰釉陶器		山茶碗	鍋、古瀬戸、土師系皿
10	木戸口(2)	〃					常滑大甕	
11	木戸口(3)	〃					壺	
12	タイコ屋敷	清岳		土師・須			山茶碗	鍋、古瀬戸系皿、古瀬戸
13	市場	〃						鍋、土師系皿
14	亀山城址	〃						天目、摺鉢、土師系皿
15	鴨ヶ谷	鴨ヶ谷					山茶碗	
16	相ヶ寺	白鳥						摺鉢、鍋、土師系皿
17	上小	高松		須恵器				天目、鍋、摺鉢
18	上小林(百石)	〃						鍋、摺鉢
19	上小林(下)	〃					山茶碗	鍋、土師系皿
20	平田	〃					山茶碗	鍋、陶製丸玉
21	北赤羽根	〃					山茶碗	鍋、土師系皿
22	南赤羽根	〃					山茶碗	鍋、土師系皿
23	大屋貝津	〃		須恵器	須恵器 灰釉陶器		山茶碗	鍋、天目、黄瀬戸、土師系皿
24	川手(1)	〃						鍋、土師系皿
25	川手(2)	〃						土師系皿
26	中梅	田代						古瀬戸、土師系皿
27	桜ノ	〃						鍋、土師系皿
28	砂畑	田代					山茶碗	鍋、古瀬戸、土師系皿
29	広畑	〃					山茶碗	鍋、おろし皿
30	吉ノ口	荒原					山茶碗	鍋、土師系皿
31	長者屋敷	〃		土師			山茶碗	鍋、古瀬戸、土師系皿
32	大和田	大和田					山茶碗	鍋、古瀬戸、土師系皿
33	寺ノ前	〃						鍋
34	北畑	清岳					山茶碗	
35	開拓地	黒瀬		須恵器				鍋
36	川尻・本郷	高里						鍋、摺鉢、古瀬戸、土師系皿
37					須恵器			

Ⅲ. おわりに

以上、作手村の遺跡の分布についてみてきたのであるが、もっぱら村誌作成までの成果をもとにしてきたものであり、今後の調査によって新たな事実がわかれば、これまでの考えを改めるにやぶさかではない。

引用文献

七原恵史「南設楽郡作手村 田ノ口遺跡調査概報」 作手村教育委員会 1986年

「作手村村誌」 作手村誌編集委員会・作手村教育委員会 昭和57年

藤井登美夫「田ノ口遺跡の火山灰」(『田ノ口遺跡調査概報』 作手村教育委員会
1986年)

久永春男「弥生文化の発展と地域性・東海」(『日本の考古学Ⅲ』)

七原恵史「獅子懸式土器についての私見」(『知多古文化研究Ⅰ』 1984年)



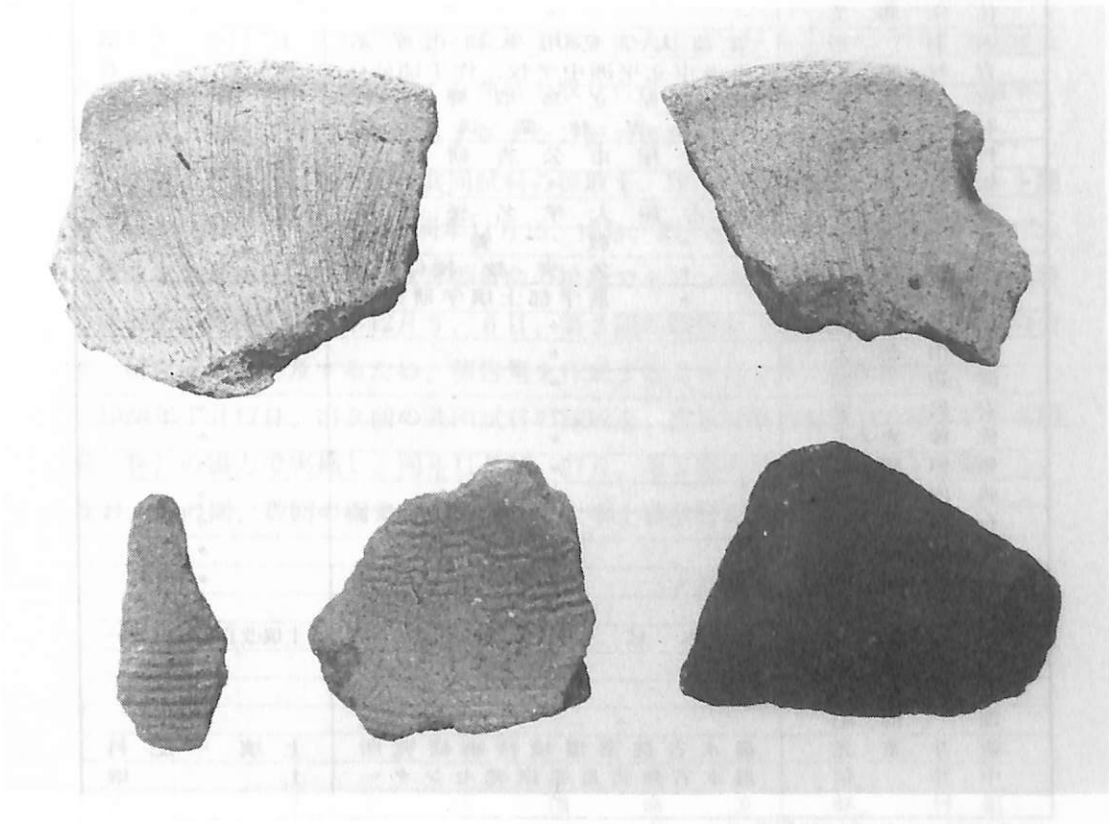
△ 田ノ口遺跡近景（西方から）

田ノ口遺跡調査の状況 ▽





- △ 山茶碗 (約 $\frac{1}{3}$)
- ◁ 深鉢 (約 $\frac{1}{3}$)
- ▽ 弥生式土器 (約 $\frac{2}{3}$)



関係者名簿

(所属五十音順)

氏名 (◎は編集係)	所 属 (参加当時のままの所属もある)	専門分野
榎田 昭一郎	愛知県環境審議会	植 物
沢井 誠◎	愛知県立犬山高校、作手団研G	地 質
藤井 登美夫◎	〃 明和高校、作手団研G	地 理
田辺 秀穂	〃	地 学
宮川 修一	〃	〃
七原 恵史	〃 守山高校	考 古
山本 康孝	安城市立桜井中学校、作手団研G	地 質
池田 潤	飯沼コンサルタント(株)	地 形 学
内田 義和	一色町立佐久島中学校、作手団研G	地 質
近藤 鍊三	帯広畜産大学	土 壤
土江 伸明	関西大学文学部OB	考 古
高木 賢二	岐阜県農業試験場	土 壤
黒坪 一樹	京都府立埋蔵文化財センター	考 古
鈴木 忠司	京都文化博物館	〃
新井 房夫	群馬大学教育学部	地 質
加藤 芳朗	静岡大学名誉教授	土 壤
種本 泰	〃 教育学部	地 質
中堀 謙二	信州大学農学部	植 物
赤井 賢成	〃	〃
烏居 孝	新城市立千郷小学校、作手団研G	地 質
渡辺 栄次◎	通産省工技院名古屋工業技術試験所	材 料 化 学
堀尾 正和	〃	〃
鈴木 憲司	〃	〃
森田 邦久	作手村立管守小学校	化 学
矢頭 一起	作手村教育委員会	—
佐宗 勝美	〃	—
大羽 裕	筑波大学応用生物化学系	土 壤
吉村 暁夫	東海市立平洲中学校、作手団研G	地 質
衣笠 弘直	鳥取県立鳥取驛学校	昆 虫 化 石
石田 仁	富山県林業試験場	植 物
村上 哲生◎	名古屋市公安局	藻 類
松井 義雄	〃	水 質
嘉藤 良次郎	名古屋大学名誉教授	地 質
柴田 博	〃 教 養 部	〃
熊田 恭一	〃 名 誉 教 授(故人)	土 壤
鎌塚 昭三	〃 農学部土壌学研究室	〃
筒木 潔◎	〃	〃
片山 新太郎	〃	〃
渡辺 彰	〃	〃
安島 馨	〃	〃
佐藤 恵美子	〃	〃
豊田 剛己	〃	〃
武内 良恵	〃	〃
石原 和美	〃	〃
片山 直美	〃	〃
菱田 和巳	〃	〃
白石 祐彰	〃	〃
烏居 精一	日本ビート開発(株)	土壌改良剤メーカー
渡部 道明	〃	〃
宮部 富仁	〃	〃
森 博昭	〃 〃 〃、作手工場	〃
新井 重光	農水省農業環境技術研究所	土 壤 ・ 肥 料
中井 信	農水省熱帯農業研究センター	土 壤
湯村 功	立命館大学	考 古

作手団研G=作手団体研究グループ

編集後記

この報告集は3回の大野原湿原研究会で報告された研究結果の一部を収録したものです。作手村・作手村教育委員会には、私達の研究活動をよく理解していただき、ご援助やご協力を賜った。更に、この報告集も作手村教育委員会から発行していただいた。特に、矢頭一起氏には現地で私達の活動の準備をはじめ、さまざまな形でお世話をしてくださった。改めて、深く感謝する次第です。

以下、研究活動の経緯を簡単に記しておきます。

1985年1月、作手村教育委員会は歴史民俗資料館に展示するため、85-1a及び85-1bコアを採取された。このコアについて検討してほしいと沢井に連絡があり、1980年以来周辺の地質を調査していた作手団体研究グループがコアの一部を分割して分析することになった。その後、群馬大学の新井房夫教授に火山灰の分析をお願いすることになった。また、作手村教育委員会の援助で ^{14}C 年代を測定した。

同年4月、数年来、作手村の泥炭層の存在に注目していた信州大学の中堀謙二氏は、院生石田 仁氏と花粉分析のサンプルを採取した。

同年11月、作手団体研究グループが石田教育賞を受けたことが新聞で報道されたことがきっかけで、愛知県東部の森林土壌中に火山ガラスを発見していた名古屋大学（当時）の新井重光助教授とも連絡を取り合うようになり、その後、土壌学、材料化学、藻類、考古学などさまざまな分野の専門家が参加するようになった。

1986年1月11日、第1回の共同試料の採取を、作手村教育委員会と日本ピート開発（株）の協力で、実施し、同年11月15、16日、第1回の研究会（別記）を開いた。

1987年2月15日、作手村教育委員会の援助でトレンチを掘り、第2回の共同試料の採取を、実施し、同年12月5、6日、第2回の研究会（別記）を開いた。この会で、研究成果を普及するため、報告集を作成することになり、編集係を決めた。

1988年1月17日、第3回の共同試料の採取を、作手村教育委員会と日本ピート開発（株）の協力で実施し、同年11月26、27日、第3回の研究会（別記）を開いた。なお、この間、数回の編集会議を名古屋大学土壌学研究室で開いた。

（大野原湿原研究グループ編集係）

編集係

- 沢 井 誠：〒481 愛知県西春日井郡師勝町片場487
☎0568-23-3382 (自宅)
- 筒 木 潔：〒464-01 名古屋市千種区不老町 名古屋大学農学部
☎052-781-5111 (内線6293)
- 藤 井 登美夫：〒462 名古屋市北区楠町味鏡南山21 南山スカイハイツ1A
☎052-902-2948 (自宅)
- 村 上 哲 生：〒452 名古屋市南区忠道町1-14 名古屋市公害研究所
☎052-692-8481
- 渡 辺 栄 次：〒462 名古屋市北区平手町1 工技院名工試
☎052-911-2111 (内線613)

大野原湿原研究会報告集 I

平成元(1989)年3月30日発行

- 編集者 大野原湿原研究グループ編集係
(連絡先は上記)
- 発行者 作手村教育委員会
〒441-14 愛知県南設楽郡作手村大字高里
Tel. 05363-7-2211
- 印刷所 名古屋大学消費生活協同組合 印刷部
Tel. 052-781-6698

